

【『琅』三十三号・あとがき】

☆はじめに、ご報告を一件。

本誌前号のエッセイ「小倉・松本清張記念館 高井戸・旧松本邸」で、「万葉翡翠」（新潮文庫）の中の駅名が「大野」となっているが「大町」の誤りではないかとの指摘をした。本誌を新潮社に送り確認をして頂いたところ、後日、お返事をいただいた。文庫の初版では「大町」になっていたが、再版時にミスが生じたようで、重版時に修正するとのことであつた。新潮社のご丁寧な対応に感謝申し上げます。☆前号で、電車の中で座席譲りに関する若者の考え方的一端を紹介した。実は、もう一つ、気になっている若者の姿がある。

駅前のスーパーマーケットのコンコースで、若者たちのストリート・ダンスを見かけるようになって久しい。道幅がかなりあるので、その半分を使って踊っていても、さほど通行の妨げにはならない。上が駐車場になっていて、やや薄暗い感じはするが、雨の心配はないし、店舗のガラス壁が鏡代わりになるので、学校帰り、会社帰りの若者たちで、夜遅くまで賑わいを見せていた。

年が明けた頃からだろうか、ガラス壁の向かい側の壁で工事が始まり、気がつくとも、高さ二倍幅六倍ほどの本物の鏡が三枚も設置され、借り物ではないダンス・スペースができた。ガラス壁時代の利用者数から考えて、かなりの順番待ちが出るのではないかと心配していたが、運用半年を過ぎた今でも、

閑散としているのはなぜだろう。

スペースの利用にあたっては、所定の期間に管理者に申し出て、登録カードの発行を受け、それを所定の場所に掲示することになっているが、踊っている人がいても、ほとんどが登録カードを提示していない、いわばゲリラダンサーたちである。そのことを知ってか、壁には、登録カードを提示しない個人・団体の使用は禁止する旨の貼り紙が出されている。若者たちは、教える人がいて、習う人がいて、一見、組織だった活動をしているように見えたが、—そこに行けば、多分会える・・・—といった程度の集まりだったのだろうか。つまり、あらかじめ使用日時を決め、それを申し出て許可を受けると言うやり方が、彼らの生き方とは合わないと言うことなのだろうか。

若者たちを街に呼び込むためという意図の下でのスペース設置と聞くと、このままでは、「ルールに従わない若者たち」というイメージばかりが残る、若者たちと市民との間に溝を作ってしまうことにならないか心配になってくるのである。（茂治）

〈次号原稿締め切り日〉 二〇一八年三月末日

『琅』三十三号 二〇一七年十月 発行

編集・発行人 松村 茂治

発行所 252-0143 神奈川県相模原市緑区橋本5-26-19

「琅の会」・TEL (042) 773-1592 (27)

印刷所 株式会社ポプルス